

明るい社会に必要なこと

生駒中学校 二年 吉田 遥香

「なんで名前を隠すのだろう。」これは、私がニュースを見て実際に思ったことです。ある事件で、加害者は「少年」と表され報道されています。凶悪な事件であってもこのように表され、私は純粹に疑問が浮かびました。なぜ犯罪、非行をした人を守るのか、そのことについて私なりに考えてみました。まず一つ目は更生という点です。人間誰しも間違いはあります。しかしその中で、反省しているかしていないかで話は変わると思います。更生するための環境は、罪を償おうとしている人のためでないといけません。そういった人達のためには、心と環境の二つを大切にすると良いと思いました。まず心については、その人自身への心のケアが必要ということです。心が不安定のままでは同じことの持つことを防がないといけないと思います。どんなにむかいても、苦しくても、絶対に間違わないしつかりとした心、考えを持つべきです。そのためには、幼い頃からの教育の他に、豊かな地域社会作りが必要だと思います。色んな人々がいる中で、誰もが平等であることや満たされることは難しいことです。それでも、救える心はたくさんあると思います。方法としては、子供食堂はもちろん大人食堂も作ってみたり、悩みを抱える子を見守るために相談できる大人のいる公園や施設を造ったりするなどが考えられます。一人一人が誰かから必要とされているという意識を持つだけで少しは防げるのではないかと思います。私自身、相談できる親や友達によって助けられているし、相談できる人にもなりたいたいと思いました。心の傷をいやすことも大切だけど、傷がないことが一番良い状態であり目指すべきことだと改めて感じました。私は始め、犯罪、非行をした人をなぜ守るのだろうと思っていました。でも、社会を明るくするために必要なことだと考えさせられました。この先、私は色んな人と出会おうと思います。もちろん犯罪、非行をした経験がある人とも出会うかもしれません。その時に快く受け入れたいと思いました。また、もっと色んな人を大切にして、少しでも誰かの助けになれたらうれしい

です。こんな小さな気持ちで、大きな社会を明るくするのだと感じました。

家族

上中学校 二年 桐村 やや

私は学校の授業で誰もが笑顔ですごせる 明るい社会をつくる運動について学習しました。授業ではたくさん詩が印刷されたプリントが配られました。私は誰が書いたのかはまったく知らなかったのです、そこに書かれたいくつかの詩を読んだ時の第一印象はどこか「寂しい」という気持ちを持った幼い子供が書いたのだろう、と思っていました。でも実際は大人に近い年齢の方々が書いたものでした。そして、少年院に入っているということも知りました。今回読ませて頂いた詩の中で、特に印象に残っているのが「誕生日」です。その詩は、どこか切なくて、寂しくて、ほんの少し温かいものでした。私がそう感じた理由は、小さい頃は、うれしいと思っただけはうれしい、悲しいと思っただけは悲しいと感情を言葉や表情を使って伝えることが出来ていたのが、いつのまにか、素直になれなかったりするというのもよくあるのではないか、と思います。そういった、気持ちの変化にも成長があり、詩にあるようにいつまでも手を引いてもらってはいけない、という心が芽生えてくるのもよく分かります。また、何でも一人で出来るのではないかと思ってしまうことも、もう自分は自立出来ているから大丈夫だ、なんて思ってしまうことも理解出来ます。私はそういう風に思っている、実際に母はどう思っているのかと思ひ、一度聞いてみたことがあります。すると、母は「手をつながなくなっちゃって、反抗されたって、自分が必死で産んだかわいい子供なんだよ」と言っていました。私は、いつでも私の味方でいてくれて、いつも強くて、たくさんの愛情をそそいでくれて、たくさんの喜びを教えてくれた母が大好きです。私は母の話を聞いてから、作者が勢い余って「産んでくれなんて頼んでない」と言ってしまったとき、作者も作者のお母さんも言葉では言いあらわせないほどたくさんの「悲しみ」であふれただろうなと思います。私はこの詩を読んでとても心に残ったのが「わたしが自分であなたを親に選んで生まれてきたんだよね」という文です。これを読んだとき、もし自分が違う人の子供だったらと思うと、母のお腹に入る前、わたしが自分であなたを親に選んで

良かった、あなたの元に生まれてくることが出来て良かったと心から思います。今までは、このようなことはあまり考えたことはなかったですが今回改めて「家族の大切さ」というものを感じました。そして、題名の「誕生日」には二つの意味があることを知りました。一つ目は作者である「わたし」の誕生日、二つ目は作者のお母さんがお母さんになった日です。誕生日は年を重ねていくだけではなく、色んな人の色んな記念日であり、それぞれに深い意味がこめられていると、この詩を読んで感じました。今回私はこの詩を通して「家族の大切さ」そして「愛の強さ」について、考えを深めることが出来ました。そして、詩の最後に作者が書いた「おかあさん産んでくれてありがとう」の文、私はここに一番の温かさと愛を感じました。私は、温かさと大きな愛を持った人々が、世界中、もっともっと増えてほしいです。

犯罪をなくすための唯一の方法

上中学校 二年 熊倉 帆花

「明るい社会」とはどんな社会だろうか。

みんなが常に笑っていれば良いのか。みんなが常に喜んでいれば良いのか。私はそうは思わない。みんながずっと笑っているのは正直気持ちが悪いし少し怖い。ずっと喜んでばかりいるのはやっぱりうそくさい。

人間にはもつとたくさんの感情があるはずだ。喜怒哀楽という言葉があるように、喜びも怒りも悲しみも楽しみも、人としての大事な感情だ。

つきつめれば「明るい社会」とは表面的なものではなく、人としての心の持ちようなのだ。では、どういう気持ちのときに人は明るさを感じるのだろうか。私にとっての心の明るさは、安心感と安らぎだ。その気持ちは自分だけでは成立しない。周りの人とのつながりがあるからこそ成り立つ感情だ。つまり私にとって「明るい社会」とは、人と人とのつながりを大切にすることだ。ではそれを踏まえて犯罪をなくすためにどうしたら良いのかを考えてみたい。犯罪者はもともと犯罪者な訳ではない。もともとは被害者だったかもしれない。では誰から被害を受けたのか。ひよっとするとその誰かも、もともとは被害者だったかもしれない。そう考えると、被害者と犯罪者のさかい目は極めてあいまいで、誰もが犯罪者になりうるのかもしれない。善と悪は簡単には割り切ることができないのだ。だからこそ犯罪をなくすために必要なことは善か悪かではない。そんなものは、時と場合によって意味を変えてしまう。そんなものよりもつと大事なことは、人と人とのつながりだ。安心感と安らぎだ。それらによって、一人一人の心は明るく、あたたかくなって、他の誰かも明るくあたたかくしてしまふ。それこそが私の考える「明るい社会」だし、犯罪をなくすための唯一の方法ではないだろうか。しかし、現在新型コロナウイルスの影響で人との関わりが大きく減ってしまった。そんな中、祖母の死をきっかけに、遠くにいる親戚たちが久々に集まった。皆で祖母との思い出を語り合い、あたたかく見送ることができた。お互いを思いやり助け合える、家族や親戚とのつながりが大切だと改めて思えた。また、自分が住んでいる地域では、ボランティアの方

が、子どもたちの安全を守るための見守り活動をしてきている。事故などが起きないように見守ってくれているだけではない。「おはよう」「おかえり」といったあいさつや何気ない会話一つで、私たちは地域の中で自分たちの居場所がここにあるということを再確認させてもらえるし、大げさに言うならば、地域社会という大きなものに包まれているという安心感と安らぎを感じているのではないだろうか。つまりその存在やあいさつのやり取りを通して知らず知らずのうちに人とのつながり、社会とのつながりを毎日感じることができているのだ。犯罪を犯してしまった人も、そうでない人も生まれたときは何ら違いはなかったはずだ。でもきつとどこかのタイミングで、安心感や安らぎを感じることのできるような人とのつながりにヒビが入ったのだ。そのことが、自分の意思に関わらず心の明るさを失わせ、心に傷を負わせ、結果として学校に行けなくなったり、人を攻撃したり、罪を犯してしまうことにつながるっているのだと思う。家族や友だち、学校や地域社会の中で、私たちは人とのつながりを感じ、安心感や安らぎを得ている。一人一人がそのつながりの大切さを意識すること、そしてそれを途切れさせないように努力することこそが、犯罪をなくし、明るい社会を作る大きな第一歩なのだ。私は考える。